

## 『ダリウス・ミヨー 没後40年』

伊藤美由紀

ダリウス・ミヨーは、81年間の生涯で作品番号443までの作品を書き続けた。作品番号1が18歳に始まり、最後の443が亡くなる前年である。単純計算して1年に約7曲書いていることになり、勤勉で多作な作曲家の一人である。作品の種類も広範にわたり、弦楽四重奏曲18曲、交響曲12曲、30曲以上の協奏曲、10曲以上のオペラなど、創作意欲に驚かされる。没後40年となる2014年、彼の音楽的思考がどのように展開していったのか振り返ってみたい。

ミヨー(1892-1974)は、南仏のエクズ=アン=プロヴァンスのアーモンド取引の商売をしていた裕福な家庭に育つ。自身の回想録である『楽譜なしの覚書』の最初の1行目に「私は、プロヴァンス出身のフランス人であり、ユダヤ人です。」と書いているように、信仰深く、プロヴァンスのユダヤ教徒の複雑な歴史に敬畏をばらい、宗教的作品においては、特別な想いをもって創作している。両親ともに音楽家でもあり、父は、地元の音楽協会のリーダーを勤めながら、声楽家の伴奏をし、母は、パリで声楽の教育を受けていた。故に、芸術への理解があり、生まれつき虚弱で一人息子であるミヨーへの幼児からの音楽教育に熱心であった。7歳で地元の先生にヴァイオリンを習い始め、その後、和声法を学び作曲を始める。ヴァイオリンを更に学ぶ為にパリ音楽院に入学するが、作曲のほうに傾倒し本格的に学び始める。

ミヨーの作品からは、『音楽家の自画像』の対談の中で、「革新という言葉は嫌いです。先人のあとを論理的に継続的に、革命的にではなく更新発展の精神によって追求したという精神をいつも持っていました。」と述べていることが、納得させられる。バッハの二声のカノンのなかに、上声部と下声部で各々の和音が別々の調性に属するように組み合わせられているのを発見するのがきっかけで、多調性に興味を持ち始めた。一つの調性に属しているものより多調の和音のほうが、柔らかく弾いた場合ははるかに微妙で、荒々しく弾いた場合にははるかに強いということに注目している。学校での伝統的なアカデミックな考え方を蔑視し、和声のクラスでは、四六の和音の準備に続く解決、因襲的な和音が好きになれなかったと言う。反面、ドビュッシーには真の和声法上の洗練を伺えたと。同時代に活躍した作曲家からは多大な影響力を受けている。ドビュッシーからは内面的影響を受け、ストラヴィンスキーの作品からの多調性に注

目し、サティの絶え間ない進化を敬愛した。また、意外なことにシェーンベルクと面識があり、1920年代と40年代のアメリカ滞在時期に交流をしている。音楽的傾向が全く違っていたが、共通の音楽に対する愛情があったと語る。ミヨーは、半音階主義から無調にいく道ではなく、調性から多調にいく道に向かったのであるが、シェーンベルクのピアノ小品に10代の時に会い、調性に対しての自由さに興味をもち真の意味で魅惑されたと回想している。

膨大な彼の作品のなかから、演奏される機会の多い作品の一部をとりあげてみる。まず、バレエ曲の《屋根の上の牛》(1919)と《世界の創造》(1923)をあげよう。舞踏の為の作品は、共同作業者の考えにあわせたものであり、造形のドラマであると言っている。前者は、コクトーの台本を使い、第一次世界大戦中にブラジル大使となったクロード・ド・ラ・ロッシュに大使館秘書としてブラジルに随行した思い出を、民謡、タンゴ、サンバなどブラジルの旋律を引用し、特徴的なテーマが調性を何回も変えて繰り返され生き生きとしたリズムで変容していく。後者は、アメリカ滞在中にニューヨークのハーレムで聴いたジャズに感激し、バレエ作品において、アルトサクソフォン独奏と室内オーケストラの編成でジャズの書法を導入したジャズバンド風の作品である。衣装、舞台装飾は、フェルナン・レジェが担当しアフリカ風の視覚的効果をねらったものであった。当時、ジャズはヨーロッパに新輸入されたばかりでレストランやダンスホールのものでされ、音楽会場やオペラのものではないと考えられていたので批評家達に酷評されたのであるが。次に、2台のピアノの為の《スカラムーシュ》(1937)をあげる。ミヨーは2台ピアノの為、4台ピアノの為の作品を何曲か書いている。鍵盤楽器を2台使用すれば、オーケストラのように幅が広がり、彼の関心事である多調、多声、ポリリズムの探求に適している。この作品は、3曲の小品からなりブラジルのサンバのリズムを取り入れ、陽気で快活な作品で人気作品となっている。《プロヴァンス組曲》(1936)は、8曲の小品からなる管弦楽曲である。この作品では、エクス＝アン＝プロヴァンス出身のフランス後期バロック音楽、18世紀頃の作曲家、アンドレ・カンプラの音楽の素材や、プロヴァンス民謡の旋律、民族楽器であるプロヴァンス太鼓などが使用されており、新古典的な書法で書かれている。交響曲は円熟期に至って初めてする仕事であるという本人の意思で、50代になって初めて交響曲に携わろうと決心し、1940-60年代に12曲書き上げている。

一生の大きな幸運は、詩人ポール・クロードに巡り会えたことだと答える。

彼は、台詞が消されることがあっても音楽の必要性を理解し、「これはひとつの提案なのだから、あなたの必要なものだけをとって下さい」と、作曲家に対しての理解力があつた。ミヨーは、オペラ、歌曲のテキストとして彼の詩を度々、使用している。外交官でもあつたクローデルとの親交は深く、ブラジル、アメリカ、西インド諸島への旅行まで随行しており、彼の音楽のなかにも、各国の音楽の影響が見られる。旅は、想像力にとって最も重要なものであると言及する。

第二次世界大戦中は、ユダヤ人であつた彼はアメリカに逃れ、カリフォルニアのミルス・カレッジで作曲を教えた。戦後は、パリ音楽院とミルス・カレッジで教鞭をとる。

ミヨーは、故郷である南仏の陽気で快活な天候、環境をこよなく愛し、音や構造が明確で、旋律やハーモニーが大衆的で、明朗でユーモアに富んだ性格の音楽を生涯、目指した作曲家であろう。